

第IV部門 鴨川河畔における料亭・旅館の空間構成に関する研究

京都大学工学部	学生員	○神辺	和貴子
京都大学大学院工学研究科	正会員	出村	嘉史
京都大学大学院工学研究科	正会員	川崎	雅史
京都大学大学院工学研究科	正会員	樋口	忠彦

1. 研究の背景と目的

現在、多くの都市の町並みは、街路を中心に組織し直され、水辺は都市の裏側になってしまっていることが多い。水辺景観の活性利用が謳われる現代においても、整備事業のが成功しているとは言い難い。本当に居心地のよい水辺空間を生むには、方法を変えなくてはならない。

本研究は、以上の問題意識に立ち、近代初期の京都鴨川河畔の空間構成を読み取るものである。特に、当時の水辺の空間の使い方として、一連の型を形成していたと思われる、料亭・旅館に着目し、絵図・地図史料などから、比較的自由に水辺を利用していた時代における空間利用のパターンを抽出することを目的とする。

2. 研究手法

川辺の店舗が描かれた絵図を分析し、当時の河畔の店舗の空間構成を把握する。絵図資料として『都の魁』を用いる。『都の魁』は明治16年(1883)に刊行された京都の商工買物案内本である。買物案内本としては初の絵入りであり、当時の京都の庶民生活の様子を知るには非常に有効な史料である。

本研究では「料理商の部」と「旅宿の部」の中から、鴨川沿岸の店舗が描かれているもの11枚を選び、分析の対象とした。またそれらの地図上での場所は絵の中に書かれた住所や橋の位置などから特定、または推定した。

3. 鴨川河畔の水辺の空間構成

鴨川沿いに位置する料亭と旅館について、絵図の読解を行い、この場所で魅力的な空間を生み出している要素はどのようなものであるかを考察する。

3.1 鴨川沿岸の地区の概要

鴨川は京都市の東部をほぼ南北に流れる河川であり、京都のシンボルの一つとして市民にも旅行者にも愛されている河川である。夏期には二条から五条にかけて西岸の飲食店が納涼床を設けており、そこで食事を楽しむ姿は、京都の夏の風物詩として定着している。

分析対象となる料亭・旅館は現在の荒神橋から五条大橋の間に位置している。特に川の東岸にあるものが多く、鴨川の東岸は東山を望むのによい場所であるため、中には東山と一緒に描いているものもある。また多くが三本木や先斗町などの遊廓に位置している。

3.2 河畔の料亭・旅館の空間構成の特徴

鴨川河畔においては、以下にあげる空間構成の特徴がみられた。

(1) 水際の視点場

建物が川岸ぎりぎりまで迫って建てられており、川を目前に客が外を望んでいるといった形態が鴨川沿いの全ての店舗で見られた。水の近くに席を構えることで、流れる水の様子を視覚や聴覚で感じられる、魅力的な空間を生むことができる。

(2) 川からのアプローチ

街路側と川側の両方に出入口がある構成が見られた。川側にも大きな開口や出入口を設けることで店の敷地が川に開いた空間となっている。つまり、川からアクセスしやすい構成になっている。正面としてではないにしても、そのような構成によって人の往来が加わり、川辺の風景がよりいきいきとした場になる。

(3) 中洲を取り込む

各店から中洲につながる簡単な橋を設けているものが多く見られる。板を一枚渡すだけに近く、各店がそれぞれ設置していたと考えられる。水により近い板橋は、そこに人の行動があることで、室内から見ている人にも水を身近に感じさせる効果があると言える。納涼床のように、はっきりと客席が川の中に入り込んだものとは異なるが、中洲を取り込むという形で水辺の空間を利用している。つまり、店舗の領域を、中洲という河川空間を取り込むような形で拡大しようとする意図が読み取ることが出来る。

(4) 「街路にむかう窓」

数店の店舗において、一階は閉じているが、二階には窓があるという形態が見られた。こうすることで、室内の客は食事という個の行為を他人に見られることはなく、それでいて街路の賑わいを感じたり外気に触れたりすることができる。また道行く人は宴会をする人の笑い声が聞こえたりすることで、歩きながらも日常とは異なる遊興の世界を味わうことができる。

(5) 段違いの視点場

川のすぐ前にある建物は1階に、道を挟んだ奥には2階に客席・客室を設けるといった形態が見られた。こうすることで、川に面していない奥の座敷からも、川岸の建物に遮られずに遠景を望むことができ、魅力ある席が増える。

(6) 橋詰の店舗 - 見る・見られる

対象店舗の中にも橋が描かれているものは多かった。橋の上は遮るものがなく見晴らしがよいため、歩行者にとってよい視点場である。また橋の上の人からは店で腰を下ろしている人の姿を見ることができ、逆に橋詰にある店舗では店内から橋を渡る人を見ることができ、そして店内の客は、橋という「絵になる」装置を風景に取り込み、楽しむことができるといえるだろう。

また橋上と店の視点場との間の距離は、近すぎず遠すぎない距離である。視線を意識することなく相手を風景の一部として見ることができ、他人同士が互いをぼんやり眺めるには好都合である。

(7) 生洲

生洲料理店とは敷地内の生洲に川魚を飼い料理する店であり、近世後期に最も盛況であった。客は、魚が泳ぐ姿を見る楽しみに加え、新鮮なものが食べられるという満足を得られる。

分析した絵図中では1軒が該当する(図1)。全体は見えないが中庭に生洲が描かれており、建物は生洲を囲むように配置している。この建物内で客は生洲の魚を見ながら食事を楽しむ。川は納涼床の客で見えず、遠景も望めない位置にある席であるが、生洲という別の見物を作ることで、客にとって魅力ある席となっている。

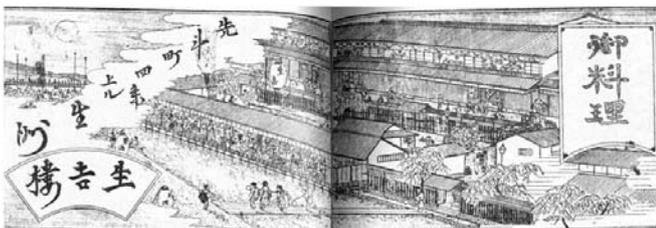


図1 料亭7

4. 結論

以上のように、鴨川河畔の料亭・旅館では「水際の視点場」「川からのアプローチ」「中洲を取り込む」「街路にむかう窓」「段違いの視点場」「橋詰」「生洲」といった特徴的な空間構成・利用の仕方がみられた。

各店舗が有する特徴をまとめると(表1)、橋詰に立地する店舗は、確実に中洲まで領域を広げており、店舗に至る川からのアプローチも用意されていることが分かった。これは橋詰に特有の見る・見られるの関係が、水辺にまで至っていることを示し、店舗が積極的に橋周辺の場作りに働きかけている様子である。その他の場所においても、中洲の利用は多く見られ、水際に高床を出すことと同様に川との連結を図っている。また、奥に長い敷地を持った店舗においては、山への眺望を確保するために、段違いの視点場を設けることが多く、それほど鴨川の水辺においては東山への眺望を重視していたと考えられる。

鴨川沿いでの全体としての特徴は、川への接近が見られる点である。この事は、「水際の視点場」「川からのアプローチ」「中洲を取り込む」という、親水性を高めることに関わる特徴が多く見られた点からも分かる。中には川を見せるための設えがなされている店舗も見られた。

	水際の視点場	川からのアプローチ	中洲を取り込む	街路にむかう窓	段違いの視点場	橋詰	生洲
料亭1	○		○		○	○	
料亭2	○	○	○				
料亭3	○	○	○		○		
料亭4	○	○					
料亭5	○	○	○			○	
旅館1	○	○			○		
料亭6	○				○	○	
料亭7	○	○	○	○	○		○
料亭8	○	○	○	○		○	
旅館2	○		○				
料亭9	○			○		○	

表1 各店舗の特徴